

# 特集 1 「学校飼育動物の生命尊重と指導」

—戦前の学校飼育動物の授業利用の視点から探る—

鈴木 哲也

## はじめに

筆者はこれまで小学校にはなぜ多くの学校には飼育小屋があり、そこではなぜ多くの場合ウサギやニワトリがいるのかについて興味をもち、歴史的背景を調べてきた。そこで本論文では今までに発見してきた事例を時系列的に示しながら、戦前の学校飼育動物の歴史を明らかにしていく。そして具体的には次の三つの疑問の解明を試みたい。

- (1) 飼育小屋の動物というとなぜウサギやニワトリが中心だったのか？
- (2) 学校飼育動物の導入当時どのようなねらいで授業に用いられていたのか？
- (3) なぜ戦後多くの学校に飼育小屋が作られていたのか？

なお以下、広く教育関係者、獣医師関係者が読むことを前提とし、引用は原文そのままではなく、現代語表記及び現代用語に修正し記述している。

## 1 明治30年前半頃の様子 - 高等小学校理科教案を例として

表1に示したのは明治32年度の現在の長野松本市にあった第一番小学開智学校の高等小学校理科の教案である。

表1 明治30年前半頃のニワトリを題材とした高等小学校理科教案の例

題目	ニワトリ	
予備	時を告げる鳥は何か	
教授	雄鶏と雌鶏との差異	
雄鶏	雌鶏	
一、大きい肉冠あり	一、肉冠少ない	
一、羽が美しい	一、羽が美しくない	
一、尾が長い	一、尾が短い	
一、体が大きい	一、体が小さい	
一、脚にけづめあり	一、脚にけづめなし	
雄鶏は気性が活発で闘いを好み、雌鶏は温和で雛を深く愛する。		
雄鶏は鳴いて時を告げ、雌鳥は卵を産みさらに温めて雛にする。		

鳥類はすべて卵生である。  
 鶏のように卵で生まれ後からかえるものを卵生という。鳥類はみんな卵生である。  
 ○獣類はどうであろうか？

表1のようにこの教案ではニワトリの雄鳥と雌鳥の違いを教えるとともに鳥類が卵生であることを教える授業となっている。このような授業内容である場合、ニワトリの実物がいる必要はなくニワトリの雄鳥と雌鳥の標本があれば十分対応できる内容であることがわかる。

この頃の理科では昆虫や小動物等の生きた実物は校庭や校外で観察させることもあるが、教室内では標本、模型、図画などを利用し授業を展開することが主とされていたのである。

## 2 明治30年代後半の様子 - 棚橋源太郎の主張から

棚橋源太郎は東京高等師範学校教授で当時教育界に影響力があつた人物である。また棚橋が執筆した『理科教授法講義 全』は、明治35年に全国各府県の視学官と師範学校附属小学校の主事を対象に、文部省が東京で理科教授法講習会を開いた時に棚橋が講師をして話した内容をまとめたものである。その『理科教授法講義 全』(明治36年)の中で、アメリカの田舎の小学校の子どもはウサギやニワトリを各自の家で飼育していることから、もし村落の学校で校内に教員住宅でもあるならば、用務の方の助けを借りて子どもに飼育させてみることもできると主張し、仕事に対する興味と自然研究に対する興味を養うのにもっとも有益な作業と言っている。このような主張がこの講習会を通して全国に広がり、全国の学校でウサギやニワトリを飼育しようとなつていった可能性がある。

棚橋は明治37年に学校園でニワトリを先駆的

に飼育していたと思われる滋賀県の土山高等小学校や水口高等小学校・実業補習女学校を訪問し、詳細事例は示されていないが、前者では潰して食べていたこと、後者では教育的に利用していたことが示されている。

### 3 明治40年代～大正初期－松田良蔵の主張や実践を中心として－

東京高等師範学校訓導であり、『最新理科教授法』『新学校園』『尋常小学校理科実習手引』『小学理科書の活用』などを執筆し、動物学、植物学に精通していた人物である松田良蔵の学級（明治41年）では、本年の4月までは今年卒業した学級でウサギの世話をしていたが、4月から自分が担任をしている尋常四年の児童に世話をさせるようになったということから明治41年の数年前から東京高等師範学校附属小学校では学級でウサギを飼育していたことがわかる。

また松田は明治19年以降高等小学校でのみ行われてきた理科が明治41年から尋常小学校5、6年でも全国で理科が行われるようになったのを受けて行われた講習会である明治42年の文部省開催の師範学校教育科講習会で実地授業研究にも関わっており、その内容は彼の理念や主張、実践は全国に影響を与えたと思われる。松田が主張する理念や主張、実践は表2の通りである。

表2より飼育にあまり負担がかからない点、子どもでも飼育できる点、餌代もあまりかからない点が示されており、その代表的な動物が哺乳類ではウサギ、鳥類であればニワトリであることがわかる。

表2 松田良蔵が主張する理念や主張、実践

○動物を学校で飼育する目的
1 動物飼育は植物の栽培よりも更に児童の興味に適合することが多い。
2 動物の飼育は植物栽培よりも道徳的情操を育成する点から考えて、一層有効。
動物発達の順序、飼育の心得並びに習性・生態等を

熟知させ標本本来の不備な点を補うことができればよい。

↓

飼育にそう多くの労力を必要としないで児童の手のみで世話をすることができ、費用もそう多くかからないものの中で代表的なものを選択して飼育させればよい。

○動物の種類

哺乳類の代表 ウサギ

鳥類の代表 ニワトリ

他、カエル、淡水魚数種、水中小動物数種、昆虫数種  
・ウサギ 性格が穏やか、ヒトに慣れやすい、習性の観察に興味をわくことが多い、飼育の方法が容易、繁殖しやすいから他からも得やすい

児童に観察させるべきところ：穴の様子、門歯や唇の様子、異様な音や微細な音に反応する様子、鼻を常に動かしていること、後脚がよく発達している様子。

・ニワトリ 主として卵を得ること

児童に観察させるべきところ：食物をついばむ方法、脚で土砂などをかきわける方法、雄の時を告げる有様、雌の卵を抱く様子、卵の発生の経過など

○飼育当番

尋常4年のウサギ当番5人で毎日交代。当番は家から使い残しの野菜や野菜の切れ端があるときには持ってくる。それとは別に毎日豆腐粕を買って用務の方がウサギに与えている。当番の役目はこれ以外に掃除、当番日誌の記入。

○授業での利用

尋常小学5年理科 ニワトリの授業

1時限目 習性、形態、雄雌、種類を学ぶ

2時限目 鶏卵の構造、孵化法、生活との関係を学ぶ

理科以外では、ウサギが死んでしまったときに全級の児童が相談してウサギのための墓を作り、綴方の時間に「兎のはか」という題を与えて綴らせた記録がある（註1）。

### 4 大正後期の様子－成城小学校を例として－

この当時（大正8年～）他の尋常小学校では理科は4年～6年でのみ行われていたが成城小学校では低学年（尋常小学1年～3年）でも理科が行われており、その中でも動物飼育が行われていた。

表4は尋常小学1年～3年における飼育の目的と対応する動物の例を示したものである。

表4 尋常小学1年～3年における飼育の目的と対応する動物の例

飼育の目的
1年 愛育できる動物を中心とした飼育

例：小鳥類、金魚類、その他家畜としての愛育できる動物

2年 興味あるものを中心とした昆虫の変態等の継続観察

例：昆虫類、魚類、小鳥類

3年 系統史の考えを加えて下等な動物も含めて観察を中心にして研究

例：ヒル、インギンチャク、水上及び水中の小動物

表4のように愛育を目的とした飼育からはじまり興味あるもの、系統史的な視点から必要なものとそれぞれの学年に応じ飼育の目的が設定されていることが特徴である。なお4年から6年はこれらの飼育の目的を繰り返して行うこととされている。

表5は大正13年の尋常小学理科5年「ニワトリの飼育」の指導案の流れを示したものである。

表5 大正13年の尋常小学理科5年「ニワトリの飼育」の指導案の流れ

大正13年 尋常小学 理科 5年「ニワトリの飼育」の指導案の流れ

○ニワトリと人との関係

人がニワトリを飼育するようになったのは少なくとも3千年前

卵の消費量はイギリスが一人1年で約200個、ヨーロッパ諸国100個、日本は一人1年で10個

○鶏舎づくり

乾いた土地で日あたりがよく風通しがよいところを選ぶ

○世話の仕方

餌：穀物、野菜、魚類、消化を助けるため小さな砂石、特に卵を産む時期に貝殻を焼いたもの 毎日三度の餌やり、火・金に清掃、土の入れかえ（春年1回）、当番一組3名

日曜日や祭日は用務の方や事務の方に世話を教員が依頼

○病の手当

羽虫の対応、その他の病気は教員や共同で世話をしているクラスと相談。

○産卵についての注意

○孵化のさせ方

○雛の育て方

表5の指導案の特徴は、この当時の理科の教科書は動物の形態や習性を教えるのが主であったのに対し、動物の飼育自体が理科の内容として扱われている点である。後に示すが教科書として理科で動物飼育の内容が示されるのは昭和10年代後

半の国民学校期の初等科理科まで待つことになる。

理科以外では長野師範付属小学校の淀川茂重の「研究学級」において大正10年に4年生に総合学習的に行われた「鶏の飼育」の実践も登場し、飼育している動物だけではなく飼育や世話自体を教育内容とする先駆的な実践が生まれてきた時期にあると言えるのではないだろうか。

## 5 昭和初期～昭和10年代前半にかけて

### (1) 尋常小学理科書（教師用）の事例

表6は昭和6年発行の尋常小学理科書（教師用）の中に見られる動物利用を示したものであり、理科授業を行ううえで実際に必要となる。

表6 昭和6年発行の尋常小学理科書（教師用）の中に見られる動物利用

目次に示されている動物名	
4年	モンシロチョウ、カエル、ホタル、ハチ、トンボ、クモ、セミ、コオロギ、ウマ、ウシ、ニワトリ、アヒル
5年	カイコ、スズメ、ツバメ、ネズミ、フナ、ゲンゴロウ、ミズスマシ、カ、カメ、ウンカ、蝸虫、ヘビ
6年	ウニ、ナマコ、二枚貝、エビ、カニ、ミジンコ、カタツムリ、ミミズ、イカ、タコ、クラゲ、インギンチャク、サンゴ、カイメン

表6のうち、カエル、ニワトリ、フナは生きた動物を用いること、アヒル、スズメ、カメは生きた動物又は標本を用いることとされているのが特徴である。

上記のうち生きたニワトリは学校で飼育していたニワトリであったと考えるのが妥当であろう。

(2) 昭和6年の『帝国教育』雑誌への投稿内容から

表7は昭和6年に『帝国教育』という雑誌への投稿があった内容を一部抜粋したものである。

表7 『帝国教育』雑誌への投稿内容

生物をあわれむとか、芸術心を育むとか、勤労精神養成という理想のもとに学校で小鳥を飼ったり、ニワトリを飼ったり、コイを飼ったり、なお大々的にヤギを飼っている学校がとても多い。その考察点並びに実行の着手はいいがその実際を覗くととてもぞっとすべ

きものがあると聞く。

初めは面白くて否その面白さは決して前記の目的ではない愉快味に誘われて、わいわいと喜びながら世話をするけれどもしばらくすると怠けるようになる。教室内に飼われた小鳥は日曜日には全く餌ももらえないで一日中あえぎ苦しんでいるようだ。これでは生物をあわれむどころか生物虐待だ。某校は勤労精神養成のために十数羽のニワトリを飼って児童が当番となり交代で飼ったらしい。いつの間にやら忘れられて大きなニワトリがこくりと倒れて先生に叱責されたと聞く。  
(以下 略)

表7より、この時代までにはこのような内容が投稿され理解されるような状態になっていたと考えられる。すなわち学校飼育動物が広く普及してきたこととその反面、教育の意図のもと飼育を行うことの現実の難しさが浮き彫りにされている。

### (3) 学校設備となる飼育小屋

昭和10年代前半までに学校地図にも飼育小屋が明記されるようになってくる。例えば図1は昭和11年当時の秋田県北秋田郡大館尋常高等小学校の学校地図である。

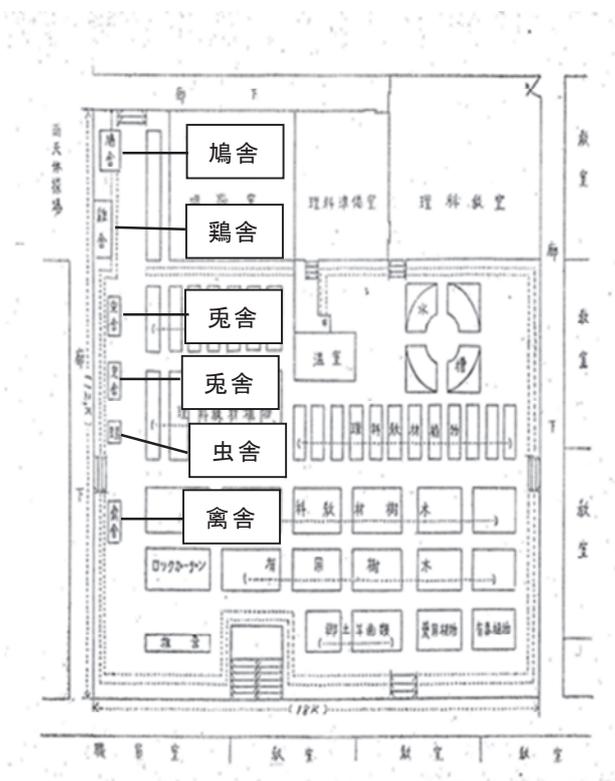


図1 昭和11年当時の秋田県北秋田郡大館尋常高等小学校の学校地図

図1の左横上から、鳩舎、鶏舎、兎舎、兎舎、虫舎、禽舎（※禽舎は鳥小屋の意）と示されている。

る。

この頃までには、学校地図にも飼育小屋が記載されている事実から、飼育小屋が学校設備の一部として制度化され、飼育小屋は学校内のプライベートな存在から学校内に必要な「なくてはならない」フォーマルなものになっていったと思われる。すなわち少なくともこの時代以降、新しく校舎を作ることがあればはじめから飼育小屋も含まれるようになっていった時代であると言えるだろう。戦後授業内容と関係なく小学校に飼育小屋が作られたのはこのことが一つの要因となっていると思われる。

## 6 昭和10年代後半～昭和20年まで

### (1) 国民学校期の理科教科書

この時期はほぼ太平洋戦争中である。しかし学校飼育動物の充実という視点からは一番理科の教育内容に含まれた時代でもある。表8は国民学校時代の1年から3年の「自然の観察」及び4から6年の「初等科理科」における学校飼育動物が扱われる内容を示したものである。また表9は「初等科理科（児童用） 第四学年 2 兎のせわ」の内容を示したものである。

表8 「自然の観察」及び「初等科理科」における学校飼育動物が扱われている内容

○自然の観察（低学年理科 1年～3年） 学校の庭（1年）、庭の動物（1年）、ウサギ（1年） 及び主にウサギの餌との関連で1年～3年を通して学校飼育動物を授業で使用
○初等科理科（4年～6年） 4年 ウサギの世話 5年 ニワトリの世話

表8より、今までの歴史の中で一番学校飼育動物が積極的に理科で用いられており、さらに世話をすることが理科の内容になっている。表9より「兎のせわ」ではウサギの飼育当番やエサとなる草や毒となる草、薬にもなる草なども理科の授業内容として扱われていることがわかる。

初等科理科のウサギの世話とニワトリの世話の内容は戦後はじめの国定教科書『理科の本』（昭和22-23年使用）までは引き継がれるがその後、ウサギやニワトリの世話を理科の内容として教科書で扱うことはなくなっていくことになる。

表9 初等科理科（児童用） 第四学年 2 兎のせわ（昭和17年）

初等科理科（児童用） 第四学年 2 兎のせわ  
兎の重さはどれくらいあるでしょうか。

- どうしてはかればよいでしょうか。
- これから元気で育つようによくせわをしましょう。
- 兎の箱をきれいにしましょう。
- 底をよくそうじしましょう。
- 出したゴミはどうしたらよいでしょうか。
- まわりもきれいにしましょう。
- 犬や猫がはいりそうなすきまがないか、しらべましょう。
- きれいになったら、兎にやる草をとりに行きましょう。

- どこへ行けばあるでしょうか。
- とって来た草の中に、兎のきらいなのがまじっていないかどうか、よくしらべましょう。
- 野原にはどくになる草がいろいろあるから気をつけましょう。
- これから一年の間、とうばんをきめて、かわるがわる兎のせわをすることにしましょう。気のついたことは日記につけておきましょう。

月 日 ( ) とうばん	
せわしたこと	気づいたこと

兎は腹をくだすことがあります。そのときには、ゲンノショウコやセンブリをたべさせると、たいていなおります。

人にも薬になる草がたくさんあります。ほって来て、かだんに植えておきましょう。

(2) 滋賀県島国民学校の記録より

表10は昭和17年発行された滋賀県島国民学校の記録の中で学校飼育動物関連の内容をまとめたものである。

表10 昭和17年発行 滋賀県島国民学校における学校飼育動物に関連する内容

○動物飼育の時期  
昭和5, 6年くらいから動物飼育をはじめる。  
○動物飼育をする効果  
動物愛護の精神を育てる。

動物の継続的な観察実験によって長期的に研究する態度を養う。  
作業愛好の精神を育てる。  
動物飼育の技術を体得することができる。  
世話をする経験を通して学習態度を形成できる。  
動物飼育によって、各教科の学習を総合的にすることができる。

○昭和17年に示された滋賀県島国民学校の動物飼育の学年プラン

- 1, 2年 金魚、カナリヤ、セキセイインコ
- 3, 4年 ハト、モルモット、ヤギ
- 5, 6年 ウサギ、ニワトリ

○ウサギの飼育目的と種類

・ウサギ飼育の目的  
ウサギの飼育は児童にとって最も歓迎されるものである。児童の興味は、静的なものよりも動的なものへとむけられる。兎舎は児童の遊び場として、慰安場として、研究の場として、はたまた作業場として多大の教育的効果をもたらすものである。

・ウサギの種類

- 白色日本種
- アンゴラ種<sup>(註2)</sup>
- など

○兎舎の管理

当番 6年1組～6組の児童

1日交代 給餌、わらの入れかえ、掃除、日記記入など 1組4名

あわせて、1, 2年より2名ずつ手伝わせ共同作業をさせる。

(全体で8名程度の児童が毎日管理)

○主任教諭及び6年担任

・繁殖の計画及び実際の運用  
屠殺(兎肉の処理、毛皮の乾燥)、毛の刈込み、販売  
その他(当番児童の指導、日誌の指導)

注目する点は教育の意図のもと飼育がなされている一方、主任教諭及び6年担任を中心に繁殖の計画と繁殖したウサギの利用まで行うことになっている点である。実際には「兎の屠殺から解体まで」及び「兎毛皮の処理」の方法が詳細に示されている。ウサギの毛皮は当時の陸軍用や輸出用として、ウサギの肉は輸出用として当時需要があったのである。

7 まとめ—三つの疑問について—

最後に三つの疑問について解明していく。

(1) 飼育小屋の動物というとなぜウサギやニワトリが中心だったのか?

飼育にあまり負担がかからず、子どもでも飼育

でき餌代もあまりかからない代表的な動物として哺乳類であればウサギ、鳥類であればニワトリとされていたから。

## (2) 学校飼育動物の導入当時どのようなねらいで授業に用いられていたのか？

はじめは標本を用いた授業を補うために生きた動物も利用され、その後飼育や世話の仕方自体が授業のねらいとなっていた。

## (3) なぜ戦後多くの学校に飼育小屋が作られていたのか？

戦前、特に戦中までに学校における飼育小屋が学校の設備として位置付き学校地図に載るくらいフォーマルな存在になっていった。しかし戦後直後を除き、教科内容の中から特に学校飼育動物の飼育や世話に関する内容がなくなっていくがそれでもウサギやニワトリがいる飼育小屋は学校にとってフォーマルな設備であり続けた。

### おわりに

ここで示してきた資料は事例の集まりに過ぎないが、資料を探しはじめて10年以上になるが、ここで示した資料以外あまりこの手の資料は発見されていない。この分野の研究がもっと盛んになり、新しい事実の発見が行われるまでの礎またはたたき台に本論文がなれば幸いである。

なお本論文は2015年度さいたま市において行った「学校飼育動物の生命尊重と指導―戦前の学校飼育動物の授業利用の視点から探る―」の講演内容をもとに一部修正し執筆したものである。

(東京未来大学こども心理学部)

### 註

(註1) 現在、家畜伝染病予防の観点から土に埋めるのではなく焼却が推奨されているため、ニワトリやウサギが死んだ場合には獣医師と相談し対応するのが望ましい。

(註2) 佐藤(1949)によれば、アンゴラウサギを飼育繁殖する目的で、イギリスから種ウサギを購入したのは大正14年のことである。その後昭和4、5年くらいに起

こった種ウサギを投機対象としたアンゴラ狂乱時代、農業恐慌時代を経て昭和12年頃までには都市部農村部を問わず全国に普及していった。当時アンゴラウサギの毛は「羊の毛よりも軽く、保温力は羊毛の三倍」あり「地球上の動物性繊維の最優秀品」とされていたようである。

### 【参考文献】

海後宗臣(編)(1967)日本教科書大系近代編 第24巻 理科(四)、講談社。

鳩貝太郎、中川美穂子(編)(2003)学校飼育動物と生命尊重の指導、教育開発研究所。

佐藤進一郎(1949)アンゴラ兎の飼育と経営、ローラン社。  
社団法人信濃教育会出版部(編)(1989)信州総合学習の源流―淀川茂重『途上』から生活科・総合的な学習へ、社団法人信濃教育会出版部。

鈴木哲也(2015)明治中期の高等小学校理科における動物利用(2)―『小學新理科教員用』の分析を中心に―、第65回日本理科教育学会全国大会発表資料。

鈴木哲也(2015)大正後期の成城小学校における飼育動物を利用した理科授業の特徴、東京未来大学研究紀要 8、137-147。

鈴木哲也(2014)明治中期の高等小学校理科における動物利用(1)―『史料開智学校』における理科教案の分析を中心に―、第64回日本理科教育学会全国大会発表資料。

鈴木哲也(2014)昭和10年代の理科教育における「学校飼育動物」を用いた教授内容と実践記録、東京未来大学研究紀要 7、197-207。

鈴木哲也(2014)大正後期成城小学校理科における動物利用-落合盛吉の「問題と実験とによる生理衛生の学習」を事例として-、未来の保育と教育(東京未来大学実習サポートセンター紀要) 1、25-34。

鈴木哲也(2012)昭和初期の理科教育における学校飼育動物の位置づけ、東京未来大学研究紀要 5、51-59。

鈴木哲也(2012)『自然の観察』におけるウサギを用いた実践内容の解明、秀明大学紀要 9、163-180。

鈴木哲也(2010)明治後期から大正初期における「学校飼育動物」の導入過程、秀明大学紀要 7、160-175。

